

「大乘」と「上座部」

一方広（／方等）、アバヤギリ派、ジェータヴァナ派—

馬場紀寿

スリランカには、いつ「大乘」が伝わったのだろうか。アバヤギリヴィハーラ派とジェータヴァナヴィハーラ派は、どの大乘經典を受容したのか。そして、両派は、他派と如何なる思想的相違があったのか。本発表は、この問いに立って、「大乘」と「上座部」の関係を論じたいと思う。

第一に、発表者自身の論文も含め、先行研究を要約して、スリランカにおける大乘の歴史を俯瞰する。遅くとも四世紀頃には大乘を指す「方広」という語がスリランカの碑文に現れ、「大乘」を信じる出家者がスリランカにやっていた。八世紀ごろには、アバヤギリヴィハーラ派が『宝篋印経』『金剛頂経』といった密教經典を、ジェータヴァナヴィハーラ派は『二万五千頌般若経』を受容していた。

第二に、マハーヴィハーラ派が編纂した史書において、「方広」が「非仏説」(abuddhavacana)と定義される過程を明らかにする。

第三に、ジェータヴァナヴィハーラ派が受容した『般若経』に焦点を当て、マハーヴィハーラ派が編纂した注釈書・史書との思想的相違を考察する。前者と後者との間にある時代観の相違は、同じスリランカの上座部に属する僧院が、一方では大乘を受容し、他方で大乘を斥けた背景について重要な情報を提供してくれるだろう。